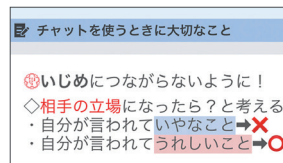




日常的な実践と失敗の繰り返しが育てる 「1人1台端末」時代のメディア・リテラシー

1人1台端末の導入や、SNS、オンライン会議、チャットなど様々なメディアが学校や家庭で使われるようになった現在、児童生徒は日常的に情報を発信する側になっています。メディアを通して情報を発信していることを自覚したうえでメディアの見方・考え方（メディア・リテラシー）を習得していく必要性が、一段と高まってきています。GIGA 端末として採用された Chromebook には、万が一に備え、安全性を担保する CEU（Chromebook のモバイル デバイス管理）が備わっているため、教室の中だけでなく、学校の外でも安全に利用できます。このような安全な環境下で情報発信の練習をするための方法やポイントについて信州大学の佐藤和紀氏、東北大学大学院の堀田龍也氏に伺いました。



児童が作成した「保護者に向けた提案」

背景と課題 Before

メディア・リテラシーの育成に必要なのは、日々の活用体験と適切な指導

「各メディアの何が便利で、どこにリスクがあるのかを知るには、日常的な実践が不可欠です」と語るのは、信州大学の佐藤和紀氏です。「安心・安全にメディアを使えるようになるには、メディアの特徴や注意点を意識しながら、実際に発信や受信を繰り返す体験が欠かせません。しか

し、一部の自治体や学校では端末やツールの使用を制限しており、児童生徒がメディア・リテラシーを身に付ける機会を狭めてしまっています。また、こうした活用体験は教員の適切な指導と共に行われるべきですが、指導方法に悩む教員も多いのが現状です」



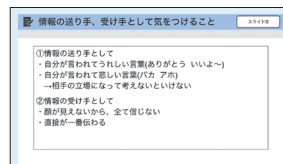
信州大学 教育学部 准教授
佐藤 和紀 氏

実践 Practice

各メディアの特徴を活かした使い方を考える～ Google Chat を例に～

ある小学校では、児童同士での教え合い、行事、委員会活動等が活性化することから、Chat を日常的に使用しています。教員は Chat の特徴を理解させたい一方で、使用時の心構えを育てるために、Chat 使用時のルールを児童が自ら考え、Google スライドにまとめる授業を行いました。児童はグループでの話し合いの末、「自分が言

われて悲しい言葉は相手に対しても送らない」「直接会う時と比べて伝わる情報が少ないので、全ての言葉をそのままは信じない」といった意見をまとめたスライドを作成。Chat というメディアの特徴を理解することで、相手を意識したコミュニケーションを学んだことが伺えました。



児童が作成した「Chat 使用時のルール」

実践のポイント Point

教室での失敗こそ、メディア・リテラシーを育てる絶好の機会

児童生徒に端末やツールの積極的な活用を促すとすると、人を傷つけたり、誤情報を信じたりといったトラブルが心配かもしれません。しかし東北大学大学院の堀田龍也氏は、そうした失敗の大切さを強調します。「失敗の多くは、経験不足が原因。学校外で大失敗してしまう前に、教室で数多く失敗も含めた経験をさせてください」。また、失敗を学習機会にする方法として、児童生徒自身によるルール作りを勧めます。起きた失敗について「みんな

はどう思う?」「どんなルールが必要かな?」と考えさせる場が、1人ひとりのメディア・リテラシーを培います。佐藤氏、堀田氏は、メディア・リテラシー教育の事例集サイトを作成し、Chat の事例を含め、すぐに実践できる事例をたくさん紹介しています。授業の流れや教材のテンプレートも掲載されていますので、何から取り組めばよいかかわからない方も、サイトを参考に実践を始めてみてはいかがでしょうか。



東北大学大学院
情報科学研究科 教授
堀田 龍也 氏

※2022年10月取材



やってみよう! これからのメディア・リテラシー教育
Google for Education を活用したメディア・リテラシー育成のための実践事例サイト
実践事例はこちらをご覧ください
<https://goo.gle/3bqiKrkj>

